

3-3 ロジックモデル

～活動が成果につながるか確認する～

キーワード ・ロジックモデル ・インプット ・アウトプット ・アウトカム

●このテーマで目指すゴール

- ・ロジックモデルを理解できるようになる
- ・施策のロジックモデルをチェックできるようになる
- ・ロジックモデルを使って有効な施策を立案できる

患者さんからの質問

行政が実施しようとする施策、私たちが推奨する施策、他の団体が求める施策が異なります。どれを選べばよいのでしょうか。

●ロジックモデルとは

ロジックモデルとは、原因と結果の因果関係の論理構造図です。平たくいえば「何のために、何をする」「何をすることで、何をもちたらか」を示しています。下記の図1のように、投入（インプット）⇒活動（アクティビティ）⇒結果（アウトプット）⇒成果（アウトカム）の連鎖図のかたちで表現するのが一般的です（本書3-2「政策評価」の図1も参照）。

ロジックモデルを作ることがなぜ大切なのでしょう。それは、施策・活動の成果をもたらす確度を上げるためといえるでしょう。「これを実施すれば」と、「こうなるはず」のつながりを理論上で事前にしっかりと確認しておくことが重要です。また、関係者の間での施策の納得性を確保する意味もあります。複数の施策の中で優先順位を決める際にも、ロジックモデルにおいて因果関係を吟味する議論をすることで、期待する成果の実現可能性の強弱が見えてくる場合もあります。

図1は、「公園のごみを減らす」という活動についてのロジックモデルの例です。その目標に向けて、3つの活動があります。それぞれに、投入、活動、結果があります。みなさんは、このモデルに違和感がありませんか。あっても当然です。ロジックモデルには完全な正解はありません。その地域の現状や環境、そして作る人やチームによって、異なってくるからです。大切なのは、環境に応じたロジックモデルを作り適宜、見直して修正していくことで、継続的に成果を意識していくことです。

●ロジックモデルの吟味

ロジックモデルを作る際の留意点がいくつかあります。良いロジックモデルの対局が、

「風が吹けば桶屋が儲かる」です。ここでの論理構造は、次のようになっています (Wikipedia より引用)。

1. 大風で土ぼこりが立つ
2. 土ぼこりが目に入って、盲人が増える
3. 盲人は三味線を買う
4. 三味線に使う猫皮が必要になり、ネコが殺される
5. ネコが減ればネズミが増える
6. ネズミは桶をかじる
7. 桶の需要が増え桶屋が儲かる

この「風が吹けば桶屋が儲かる」における問題点は、原因と結果をつなぐ因果の鎖が弱いこと、そして、原因と結果が多数 (7つ) の段でつながっているということです。よいロジックモデルの特徴はその逆で、因果関係が強く、因果の段数が少ないことです。

○因果関係の強さの吟味

ネズミが増えてもネズミが桶をかじるとは限りません。ネズミが桶をかじっても、桶が使えなくなって買い替えが起きるとは限りません。因果の鎖が弱いといえるでしょう。図1の例では、ゴミを拾えばゴミが減る可能性は高いです。看板を立てることでゴミを持ち帰る人が増えるかどうかは、どうでしょうか。検診に置き換えて考えてみます。検診のチラシをまいても検診に行く人がどれほど増えるかは不透明でしょう。検診対象者に直接勧誘すれば増える可能性がかなり高いです (内外の研究によって、エビデンスと呼ばれる証拠があります)。このようにエビデンスがある場合は、そうした施策を優先することを考慮すべきです。もちろん、エビデンスがある施策は少ないですから、論理の吟味をすることによって、政策決定を審議する委員会などでコンセンサスを得るプロセスなどを経ることが重要となります。

○因果関係の段数の吟味

風が吹けば桶屋が儲かるは7段論法になっていました。それぞれが実現する確率が3割としても、3割の7乗は5000分の1の確率となります。2段ならば3割の2乗で約1割です。1段ならば3割の確率となります。施策の因果に省けるステップがあれば、除いた方が好ましいことが分かります。ただし、同時にステップの間が飛びすぎないようにすることも大切です。実施する人たちがそれぞれのステップでやることと成果を実感でき、自分たちがその道のりを歩んでいけると思える距離にすることがポイントです。

上記の2つの観点を、施策の例において考えてみましょう。下記のように2つの施策とロジックモデルがあったとします。どちらがよいでしょうか。

(施策 A) 検診対象者に電話勧誘する

電話をする⇒電話がつながって勧誘する⇒行こうと思う⇒行く

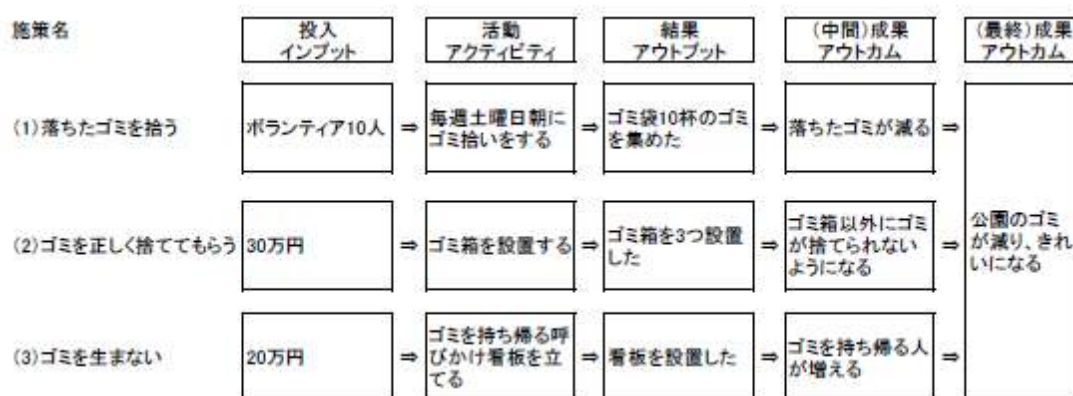
(施策 B) 駅前で検診勧誘のチラシをまく

チラシを渡す⇒受け取る⇒読む⇒検診の対象者である⇒行こうと思う⇒行く

この例では、Aの方が、各ステップのつながりがよく、それぞれを引き起こす確度も高く、ステップ数も少ないので、成果を生む可能性が高そうです。因果の鎖が太く短くしっかりとつながっているか、確認する習慣を付けましょう。

上記のようなことに留意して、地域の施策のチェックができますし、提案施策の優先付けもできるでしょう。なお、行政施策の吟味のみならず、患者団体の活動方針決定などの際にもロジックモデルは活用できます。

<図 1>ロジックモデル例 公園のゴミを減らす活動の例



◇ さらに詳しく知りたい方のために

- ・ 竜慶昭、佐々木亮『「政策評価」の理論と技法』多賀出版、2004年
- ・ ロッシ、ピーター・H.ほか『プログラム評価の理論と方法—システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社、2005年
- ・ パットン、マイケル・Q『実用重視の事業評価入門』清水弘文堂書房、2001年